

厚生省「小児期白血病患者の生存の質改善  
に関する研究」班

第一次アンケート調査結果（昭和62年2月）

（分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究）

○小倉雄一<sup>1)</sup>、山本正生<sup>1)</sup>、植田 穰<sup>1)</sup>、横山 雄<sup>2)</sup>、  
桜井 実<sup>3)</sup>、宮崎登雄<sup>4)</sup>、上田一博<sup>5)</sup>、別所文雄<sup>6)</sup>、  
中沢真平<sup>7)</sup>、月本一郎<sup>8)</sup>、鞭 照<sup>9)</sup>

要約： 一年以上完全寛解を持続中の白血病患児を対象として、後期障害についてアンケート調査を行った。その結果、登録患児数は766例で、低身長は20例（2.6%）、肥満は29例であった。脳・神経障害として、運動障害が9例、感覚知覚の障害7例、知能・学習面での障害19例、また神経・理学的検査での異常例が10例、EEG異常例が33例、CT scan での異常例が39例報告された。心臓障害はALLに8例、ANLLで5例報告された。ALLでの障害例は特定の1施設による報告であった。

見出し語： 小児期白血病、生存の質、後期障害

方法： 日本小児血液学会評議員の所属する小児科診療施設31施設に協力を依頼した。期間は昭和62年1月より3月で、調査は（1）対象症例数、（2）発育障害（低身長、肥満）、（3）二次性徴障害、（4）神経障害、（5）心臓障害、（6）その他の臓器障害、（7）結婚・妊娠、（8）二次性腫瘍に関する項目について行った。

障害の診断基準は、身長・体重については昭和55年度厚生省学校統計調査資料を基準として、身長が-2SD以下を低身長、体重が+20%以上を肥満とした。それ以外の項目については各施設の基準に依るものとしたが、今回当研究班で作成した「評価すべき項目と、厚生省心身障害研究班

「小児白血病の治療に関する研究班の申し合わせ事項についての薬剤使用中にみられた随判所見の判定基準を、報告の際の後期障害の診断・管理の参考としていただくものとした。

結果： 回答は24施設より得られ、以下のごとくであった。（1）登録患児数は、ALL684例、ANLL73例、その他9例、計766例であった。（2）発育障害のうち、低身長は20例、肥満は29例、負荷試験の結果、成長ホルモン値が<7 ng/mlを欠損、7~10 ng/mlを部分欠損とした場合の成長ホルモン欠損症例は12例、部分欠損は2例であった。これら低身長の報告には発生頻度の高い一部の施設がみられた。すなわ

1) 日本医大小児科、2) 弘前大学小児科、3) 三重大学小児科、4) 佐賀医大小児科、  
5) 広島大学小児科、6) 東京大学小児科、7) 慶応大学小児科 8) 東邦大学小児科、  
9) 自治医大小児科、

ち、低身長例の発生は全体では766例の2.6%であったが、3施設からは15.1% (8/53)、26.7% (4/15)、25.0% (2/8)と高頻度の報告があり、これらの施設を除くと0.9% (6/690)であった。成長ホルモンについて検索を行ったことのある施設は10施設あり、欠損と判定された例は3施設のみから14例報告された。

(3) 二次性徴遅延が認められた男子は3例で、この内15歳以上は2例であった。一方、女子は1例で、15歳以上の症例の報告はなかった。

(4) 脳・神経障害として、運動障害が9例、感覚知覚の障害7例、知能・学習面での障害19例が報告された。内訳は、脳症や頭蓋内出血などにより、種々の神経症状を併せもつ症例であり、施設毎に1、2例の少数の障害例が存在することが窺われ、特に多発している施設はなかった。また、神経・理学的検査での異常例が10例、EEG異常例が33例、CT scanでの異常例が39例報告された。CT scanでの異常所見としては、脳内石灰化、脳萎縮、脳室拡大が報告された。EEG、CT scanなどにより系統的な神経学的検索を行った1施設では、神経・理学的検査では異常例は無かったが、EEG異常が58例中20例、CT異常が58例中24例に認められた。一方、この施設以外からのEEG異常は13例、CT異常は15例のみの報告であった。

(5) 心臓障害はALLに8例、ANLLで5例報告された。ALLでの障害例は特定の1施設による報告であった。

(6) その他の臓器障害として20例が報告された。その内訳は、肝機能異常、低Iグロブリン血

症、白内障、腎炎、腎性尿崩症などであった。

(7) 結婚・子供に関する調査では、男子では2名結婚し、1名には子供がおり、女子では、5名結婚し、3名に子供があった。

(8) 白血病以外の悪性腫瘍の診断を受けた者はなかった。

まとめ：今回集計した766例の白血病患児に認められた障害例の報告数は、全体でみると欧米の報告に比べて少ないものであった。しかし、後期障害についての系統的な検討を行っている一部の施設からはより高頻度に障害例が報告される傾向がみられた。今後、白血病後期障害の実態および、治療方法との関連を明らかとするためには、既に系統的な検討を行っている施設や、障害例の報告数の多い施設の協力を載き検討を進めるとともに、白血病患児の治療に携わる各施設が後期障害に対してより積極的に取り組んでゆく必要があると思われ、これら施設の広範な協力が望まれる。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:一年以上完全寛解を継続中の白血病患児を対象として、後期障害についてアンケート調査を行った。その結果、登録患児数は766例で、低身長は20例(2.6%)、肥満は29例であった。脳・神経障害として、運動障害が9例、感覚知覚の障害7例、知能・学習面での障害19例、また神経・理学的検査での異常例が10例、EEG異常例が33例、CTscanでの異常例が39例報告された。心臓障害はALLに8例、ANLLで5例報告された。ALLでの障害例は特定の1施設による報告であった。